日本性科学会ニュース

第35巻 第2号　　平成28年（2016年）　6月

発行人：大川　玲子　印刷所：㈱ 絢 文 社

第36回日本性科学会学術集会／第17回性科学セミナー

日　　時：2016年9月17日（土）第17回性科学セミナー／2016年9月18日（日）第36回日本性科学会学術集会
場　　所：長野赤十字病院　基幹災害医療センター
〒380-8582　長野市若里5丁目22番1号　TEL 026-226-4131（代表）　FAX 026-224-1065
JR長野駅東口より約1.8km　バス7分、タクシー 5分、徒歩30分
参 加 費：日 本 性 科 学 会　5,000円（学生1,000円）
性科学セミナー　3,000円（学生1,000円）
日本性科学会＋性科学セミナー　7,000円（学生2,000円）
会　　長：天野俊康　長野赤十字病院第一泌尿器科部長
テ ー マ：地域に根ざした性の健康を考える

特別講演：「性科学から Men's Health をひも解く」　（座長：天野　俊康　長野赤十字病院泌尿器科）
永井　　敦　川崎医科大学泌尿器科学教授
会長講演：「泌尿器科医として性科学へ関与できること」　（座長：大川　玲子　日本性科学会理事長）
天野　俊康　長野赤十字病院泌尿器科

シンポジウムⅠ：「地域活動での思春期教育再考」
座長：高波真佐治（東邦大学医療センター佐倉病院泌尿器科）
泌尿器科の立場から　今井　　伸（浜松聖隷病院泌尿器科）
産婦人科の立場から　高橋　幸子（埼玉医科大学地域医学推進センター）
養護教諭・性教育研究の立場から　白澤　章子（"人間と性"教育研究協議会）
助産師の立場から　北原　光子（長野県看護協会不妊専門相談員）
シンポジウムⅡ：「地域に根ざした男性学（アンドロロジー）の診断と治療」
座長：永尾 光一（東邦大学医学部泌尿器科）
勃起障害（ED）・射精障害（EjD）　佐々木春明（昭和大学藤が丘病院泌尿器科）
男性不妊症　日比　初紀（協立病院泌尿器科）
加齢男性性腺機能低下（LOH）症候群　辻村　　晃（順天堂大学浦安病院泌尿器科）
性同一性障害　中塚　幹也（岡山大学大学院保健学研究科）
パネルディスカッション　「ピアカウンセラーが語る性教育が男性に与える変化」
（座長：北村邦夫　一般社団法人日本家族計画協会、渡邉智子　丸山産婦人科）
パネリスト：朝岡　　徹（コトナハウス（地域に開かれたシェアハウス）ファシリテーター兼企画運営
株式会社東芝ハード設計エンジニア）
馬場創太郎（大阪大学工学研究科博士課程）
山田　和輝（ネクストエナジー・アンド・リソース株式会社経営戦略室）
一般演題：
一般演題募集：一般演題発表を希望される方は、①演題名、②演者氏名（発表者に○）、③所属、④連絡先住所、電話番号、FAX番号、メールアドレス、⑤抄録原稿800字以内を、件名：第36回日本性科学学術集会演題応募として、下記メールアドレスへお送りください。採否、発表方法などの詳細は、後日ご連絡いたします。なお、一般演題の発表は、すべてパソコン・プロジェクターを使用する口演のみの予定です。
演題締切：2016年7月2日（土）
送 付 先：jsss36@nagano-med.jrc.or.jp

懇 親 会　（日本性科学連合第17回性科学セミナーと合同）：2016年9月17日（土）　長野赤十字病院　クロスカフェ

第36回日本性科学会事務局：〒380-8582　長野市若里五丁目22番1号
長野赤十字病院泌尿器科　担当：天野俊康
TEL 026-226-4131（代表）　FAX 026-224-1065
E-mail：jsss36@nagano-med.jrc.or.jp

Vol. 35　No. 2

日本性科学会
〒113-0033　東京都文京区本郷3－2－3　森島ビル4F
TEL・FAX　03－3868－3853

〔症例研究会から〕

日本におけるセクシュアルマイノリティに関する性教育の実態調査

千葉大学看護学部看護学科
京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻女性生涯看護学修士課程
岩　田　歩　子

今回の症例研究会では、日本におけるセクシュアルマイノリティに関する性教育の実態調査について取り上げた。

近年、アメリカで同性婚が認められたことを追い風にして、日本でも文部科学省による性同一性障害の子どもたちへの支援が明らかにされたことや、パートナーシップ条例が成立する等、セクシュアルマイノリティへの社会的な認知は急速に広まってきた。しかし、文部科学省(2014)による「学校教育全体（教科横断的な内容）で取り組むべき課題（食育、安全教育、性教育）と学習指導要領等の内容」にセクシュアルマイノリティについての教育指針はない。このような背景より、日本ではダイバーシティを推進する社会に変化しつつあるが、教育の不足が問題点として考えられた。

先行研究によるとセクシュアルマイノリティを含む性教育の需要や、性教育の実施報告による効果は立証されているものの、当事者としてセクシュアルマイノリティに関して、どのような配慮を持って、どのような教育をしてほしいのかという点ではまだ明らかになっていない。そこで、学校／学校以外で性教育を受けた内容とその時に感じた思い、当事者として学校の性教育の中で知りたかったこと、学校で性教育を行うことをどのように捉えているかについて半構造的インタビューを行い質的に分析した。ここでは分析した結果のうち、「学校での性教育に対する当事者のニーズ」について以下の表に示す。

表1　学校での性教育に対する当事者のニーズ

カテゴリ	サブカテゴリ
1.学校で早期からセクシュアルマイノリティについて身体的・精神的・社会的側面から学ぶ	・早期からセクシュアルマイノリティについて身体的・精神的・社会的側面から学べる環境作り ・性教育でセクシュアルマイノリティを取扱ってほしい
2.全体への教育は長時間にならないよう配慮し、個別での面談を実施することで追加の情報を提供してほしい	・個別での面談を実施することで全体教育の不足部分を補うことや、より慎重に関わることを求められるケースに対応する ・若い子は悩みやすいため、優しく接する
3.ラポールの形成のために日常から理解があることを示す	・差別に直面することで信頼感を失った話の中にセクシュアルマイノリティを無視していないことを織り交ぜて話す ・話を聞いてくれる人が常駐していることで話しやすい環境ができる
4.カウンセリング室の説明と同意を得た上で悩みを傾聴してほしい	・信用できたら悩みを打ち明けられるかもしれない ・個人のプライバシー保護の面と生徒全体の保護のための相談者への説明
5.知識を持った人に話を聞いてもらった上での情報提供	・困っている内容についての情報提供 ・知識のないまま接することなく、勉強して理解して欲しい気持ちがある

考察として、本研究では日本におけるセクシュアルマイノリティの困難感や、今後の学校教育へのニーズに対する知見が得られた。地域差や学歴がセクシュアルマイノリティに情報格差をもたらしている可能性もあり、どのような状況にある方も等しく情報を入手することができる環境を作る必要があると考えられる。そのため、教育者が知識と配慮を持ち、早期からセクシュアルマイノリティに関わることが希求される。

インタビュー結果より、「保健室なら誰でも利用しやすい」「常に固定された先生がその場所にいるため安心感がある」「保健だよりを活用して情報提供ができる」「保健室ならば何かあった時に休むことができる」という声があり、特に養護教諭が性に関する情報提供を行うことや、個別での面談に応じる役割を持つことを期待する部分も多くあった。金子(2015)によると、養護教諭は様々なセクシュアリティの生徒に出会うことができるとあり、養護教諭が自身の知識と経験の蓄積や他職種との情報の交換を行うことで、幅広い視野を持ち、悩みを持つ生徒に介入しやすい人的資源の一人となることが所期される。

研究会では女性のセクシュアリティの揺れ動きやすさについて考慮することも重要なのではないかと指摘があった。情報過多となっている社会において、適切な情報を選択できないことでセクシュアリティに関する悩みを持つ子に対してどのように関わっていくかについても意見が上がり、今後も検討していく必要があると考える。

性の健康と性の権利は開催テーマに添って充分に議論されたか
―第14回アジア・オセアニア性科学連合国際会議参加報告―

大阪府立大学地域保険学域教育福祉学類　　山　中　京　子

2016年3月31日から4月3日の4日間、韓国の釜山において第14回アジア・オセアニア性科学連合（Asia Oceania Federation of Sexology : AOFS）国際会議が「Think Sexual Rights, Talk Sexual Health（性の権利について考えよう、そして性の健康について語ろう）」をテーマに掲げ開催された。学会長は国立釜山大学医学部泌尿器科教授のパク・ナムチュル博士が務められた。

学会長の公式発表によれば、学会参加者は15カ国（および地域）187名に及び、その内訳は開催国の韓国が最も多く72名で、次いで日本からの32名が二番目に多く、インドネシア（29名）、ガーナ（13名）、台湾（7名）、オーストラリア（4名）と続いたとのことであった。プログラムの概要は、4つのサテライト・シンポジウム、6つのシンポジウム、2つのプレナリーセッションの他に、口頭発表が4セッション（各セッションテーマ：①性教育、②男性の性の健康と性機能不全、③性の権利、④性の健康（その他を含む））合計37名、ポスター発表が19名だった。

すべての発表やシンポジウムに参加することはできなかったが、自分が参加したプログラムと大会抄録集をもとにこの大会の特徴を考察したい。4つのサテライト・シンポジウムのうち3つのテーマが「男性の性機能障害の治療」、「ホルモンとセクシュアリティー（3つの発表のうち2つの発表がテストステロン関連）、「アドロロジー関連」であったこと、また、2つのプレナリーセッションのうち一つのテーマが「勃起障害の治療」であり、また、上述した口頭発表のセッションのテーマも一つが「男性の性の健康と性機能不全」となっており、本会議で重点的に学術的議論が深められたテーマが男性の性の健康、特に性機能の健康とその治療だったことが伺える。本会議のテーマ「Think Sexual Rights, Talk Sexual Health（性の権利について考えよう、そして性の健康について語ろう）」に照らすと「性の健康」について、特に男性の性の健康に関する議論は深められたと言えよう。

しかし、その一方で、女性の健康や性機能障害に関するテーマはシンポジウム5で女性の不妊が扱われたにとどまり、充分ではなかったと思われる。また、会議テーマの前半にある「性の権利について考えよう」に関しては、口頭発表のセッションの一つのテーマが「性と権利」であったこと、シンポジウム2のテーマが「障害のある人のセクシュアリティー」であり、そこで障害のある人の性の権利が議論されたこと、また、プレナリーセッション2「セクシュアリティーに関する幅広い問題」で、WASの性の権利宣言に関連した発表（大阪府立大学・東優子氏の発表）があったことを除くと、それほど大きく議論の場が準備されていたとは言えず残念に思われた。性の権利に関連したテーマと考えられるが、ホモセクシャル、バイセクシャル、トランスジェンダーなどLGBTに関連したプログラムはシンポジウム6のみとなっており、2015年6月にアメリカの連邦最高裁判所が同性婚を憲法上の権利として認める判断を示したことを受け、アジアやオセアニアでのこの問題やさらに広くLGBT全般に関する実践や研究の動きについてこの大会で情報を得られたらと期待していたが、発表は日本と韓国からの少ない数の発表にとどまった。アジアやオセアニアの各国の性科学連合のメンバーの関心を反映しているのか、今回の会議の傾向なのか明確にはわからない。

もう一点ブリスベンで行われた第13回AOFS国際会議では、若者のためのラウンドテーブルというプログラムが準備されており、若者が自ら運営し、参加者も若者であり、自らの世代の問題を議論するという場が準備されていた。今回の会議では、「メディア、SNSとセクシュアリティー」という若者に関連したテーマのシンポジウムはあったが、若者自らが主体となって議論するようなプログラムはなかった。

さて、AOFSの組織の動きを少し報告したい。AOFSは1990年に結成されて以来その事務局を香港においてきたが、今年から事務局をオーストラリアに置くこととなった。また前回のブリスベン会議（2014年）の際におこなわれた役員会で、AOFSの組織に関する新たな規則（Bylaw）の策定が決定され、この2年間準備してきたが、今回の役員会議で新たな規則が発表され、承認された。

最後に、次回第15回AOFS国際会議は、インドのチェンナイで2018年8月に行われる（詳しい日程は後日発表）。大会長はナラヤナ・レディー博士である。博士は幅広く性教育の活動もしてこられており、役員会議終了後に短く立ち話をした際、性のQOLも考える会議にしたいと語っておられた。元々独自の性文化が豊かにあるインドである。博士と別れの挨拶をした際「チャンナイでお目にかかりましょう」と即答してしまった。今回の会議とはまた異なる内容の会議となるのではないかと期待している。

資格認定委員会より

日本性科学会副理事長（認定制度担当）　阿　部　輝　夫

日本性科学会「セックス・カウンセラー」「セックス・セラピスト」資格認定規定、並びに更新規定（日本性科学会雑誌vol.1に掲載）に基づき、2016年度の新規資格認定並びに更新資格認定を行います。

尚、資格認定申請期間は、新規・更新ともに8月1日～8月31日です。新規資格認定希望者は、申請書類を日本性科学会事務局までご請求下さい。資格更新該当者には、事務局より7月中に更新申請書類を郵送いたします。

いずれの場合も資格認定規定を御熟読の上、ご申請下さい。御不明な点は学会事務局にお問い合わせ下さい。

（TEL　03-3868-3853　受付時間　月・水・金10：00～13：00）

新刊紹介

『ジェンダーとセックス　精神療法とカウンセリングの現場から』

弘文堂／著者　及川 卓

はりまメンタルクリニック　針　間　克　己

私が、著者の及川卓先生の名前を初めて知ったのは、1990年代前半の頃である。1998年に埼玉医科大学で性同一性障害に対して性別適合手術が行われる以前、日本には性同一性障害に関する文献がほぼなかった。そのような時代、及川先生が師匠の小此木啓吾先生と共著で記された、『性別同一性障害』（現代精神医学体系8　中山書店　1981年）は、日本語で唯一に近い貴重な性同一性障害の文献だった。その後、日本性科学会で、直接お話しいただける機会を得るようになったが、そのお仕事の全貌を知ることはできなかった。しかし、本書は、及川先生の長年のセクシュアリティの多岐にわたる論文が収録され、先生の思弁の蓄積を知ることができた。

本書のもっとも興味深い点は、最近の論文だけでなく、1981年からの論文を収録していることだ。この間に日本では性同一性障害への医療の取り組みが始まり、海外では1980年代に同性愛が精神疾患リストから外された。このような環境の激変の中、その臨床的取組も当然変化したはずである。しかし、それでもなお、この本は1980年代の「古い」論文を載せている。今の時代から見ると批判を浴びかねない内容も含む。だが、それゆえに貴重なのである。たとえば「ジェンダーの病と精神分析の実践」（1989年発表）では、性同一性障害などの「ジェンダーの病」で、精神療法を望むものは「人間関係―関係性（対象関係）に、きわめて激しい破壊と憎悪とを、心の奥底に有しているのではないか」と疑問を語り、治療者として「それをやりぬく力があるのかどうなのか」と不安を率直に述べている。現在からみれば、このような記述は、ネガティブな側面を強調し過ぎて、差別や偏見の助長につながる、と批判を浴びかねない。しかし、この正直な再録が、当事者のメンタルを追い込んだ1980年代の社会状況と、その中で孤軍奮闘する及川先生の壮絶な覚悟を浮き上がらすのである。このように本書は30年間の歴史を語ると同時に、歴史の中でも変わらぬ普遍的問題を提示しているのである。

章立ては、「性別違和状態」にはじまり、「ゲイ・アイデンティティの形成」「ジェンダーの臨床的エスノグラフィー」「セックス病の新時代」「小児性愛の謎」「S&M」と、疾患分類の枠組みを飛び越え、多岐にわたる。また、ジェンダー・アイデンティティ概念誕生の中心的役割を果たしたストラー博士との対談、ゲイを公言している作家伏見憲明氏との対談、同性愛の脱病理化運動の先陣を切ったシルヴァースタイン博士との対話、インドのヒジュラの写真で知られる石川武志と行ったヒジュラ研究など、貴重な対談、論文も満載である。セクシュアリティを学ぶものに必須の一冊といえるだろう。